

『兵法家伝書』 伝本の比較研究Ⅱ — 細川家本と小城鍋島家本 —

A Comparative Study of the Side Books of "Heihokadensho" II

加藤 純一

Junichi KATO

キーワード：『兵法家伝書』、小城鍋島家本、活人剣下巻

Key Words : "Heihokaden-Syo", The Ogi-Nabeshima's manuscripts, Katsuminken Gekan

序

本稿は、前回の「『兵法家伝書』 伝本の比較研究 — 細川家本と小城鍋島家本 —」の続きであり、細川家本『兵法家伝書』の下巻に相応する「兵法家伝書下巻」の翻刻（「無刀之巻」を除く）を中心に既に活字化されている小城鍋島家本との比較を試みたものである。

周知のように、柳生宗矩『兵法家伝書』は四系統の伝本（江戸家本、小城鍋島家本、鹿島鍋島家本、細川家本）が確認されており、江戸柳生家には小城、細川の伝本の原本と思しきものがあるのとこのことであるが、確認はできていない。『兵法家伝書』の研究は、その思想的背景並びに形成過程については議論がなされてきたが伝本間の構成比較はなされてこなかった。門外不出とされた同書であるが、

以外に流布本を目にする機会も多い。その際、それが四系統のどれに相応するかを判断する材料として、先ず四系統間の相違を明確にする作業が必要と考えられた。このような背景より、現在、細川家本の翻刻を中心に、小城鍋島家本との比較よりそれを導き出そうと試みている。なお、細川家本は『日本武道体系』^①に複製収録されたものを用い、比較対象となる小城鍋島家本は拙著『兵法家伝書に学ぶ』^②の資料編に掲載されているものを用いた。

一 細川家本『兵法家伝書』下巻（無刀之巻を除く） 凡例

1 本書は『日本武道体系』に複製収録されたものを底本とした。柳生宗矩が寛永一四年に細川忠利に伝授したものである。

2 本書での翻刻作業では、最初に本文を入力し、続いて朱書きの部分を加筆した。読点は文末箇所では句点に換え、不足箇所においては原文に従い加筆は行わなかった。

3 朱書きの濁点は書き入れたが、本文にない場合にはそのままとした。

二 本文

兵法家傳書下巻

○一 百様之構あり共、唯一に勝事

右、きはまる所は、手字種利劍、是也。百様千様にをしへなし、ならひなして、身かまへ、太刀がまへ、百手につかひなすも、此手字種利劍一つを眼とする也。敵のかまへに、百様ありとも、わが身に、百様あり共、手字種利劍の目付に、極也。秘傳なる故に、本字を書あらはさずして、音をかりて、手字種利劍と書者也。

○一 有無ノ拍子、附、有も有、無も有、と云事

右是は、手字種利劍に付て、有と、無と、いふ習あり。あらはる、時は、有也。隠時は無也。此、かくれ、あらはるゝ、有無即手字種利劍也。太刀をにぎる手にあり。佛法に有無の沙汰あり。是になぞらへていへり。凡夫は、有を見て、無を見ざる也。手字種利劍には、有をも見、無をも見る也。有も在無も有也。有の時は、有に付てうち、無無の時は、無に付てうち、又有をまたずして無をうち、無をまたずして有をうつ程に、有も有、無も有云也。老子経の

註に、常ニ有常ニ無と云事あり。有も常にあり、無も常にあり。かくる、時は、有即無となる。あらはるゝ時は、無即有となる。たとへは、水鳥の、水にうかひたる時は、有也。水に入たる時は無也。然は、有とおもふも、かくれぬれは無也。又無とおもふも、顕るれば、有なり。さあれば、有無はたゞかくれ、あらはるゝ也。其躰は一なり。然は、有も無も常なる者也。佛法には、本無本有と云也。人の死するは有かくるゝ也。人の生るゝは、無あらはるゝなり。其躰常なる者也。太刀をにぎる手に有無と云事あり。秘傳也。是を、種利劍と云也。手を伏ぬれば、有かくるゝ也。手を仰ば無又顕るゝ也。如レ此云とも、相傳せずは、此等の言葉しりかたき事也。有の時は、此有をみて、有をうつへし。無の時は、此無をみて、無を打へし。故に、有も有、無も有と云也。有と云物、即無也。無と云物即有也。有無非レ二。此ノ種利劍の有無をみる事ちかは、百手をつくしてつかふ共、勝利あるへからず。百様の兵法も、此一段に極る所也。

○一 水月 付其影の事

右、敵と我との間に、凡何尺あれば敵の太刀我身にあたらぬと云つもありありて、その尺をへたてゝ、兵法をつかふ。此尺のうちへ、踏入、ぬすみこみ、敵に近付を、月の水に、影をさすに、たとへて、水月と云也。心に水月の場を、立あはぬ以前に、おもひまふけて、立あふへし。尺の事は、口伝すべし。

○一 神妙劍之事、付、座の心懸、身に取、足にとる事

右神妙劍、至極之大事也。我身に、神妙劍とさす所あり。わが身

にありては、神妙劍の、劍の字を劍の字に書て、しるへし。右にかまへても、左にかまへても、太刀、神妙劍の座を、はなれぬ程に、劍と云字に心あり。又敵の身にありては、劍の字を、見の字に書て心得へし。此神妙劍の座を、よく見て、きりこむ程に、見る所か簡要也。然は見の字に心あり。

○一 神妙二字之釋

神在^レ内^ニ而妙^メ蹟^ニ於^{ホカ}外^ニ一名^{ナツケテ}為^ス二神妙^ト一

神妙の二字の心をのへたり。神内に在て、妙外に蹟る。是を神妙と名付る也。たとへは、一本の木に、内に木の神ある故に、花さき、匂ひ、みとり立、枝葉しげる也。是を妙と云。木の神は、木をくだきても、是ぞ、神とて、目に見えねとも、神なくは花緑も、外にはあらはるまじき也。人の神も、身をさきても、是ぞ神とて、目には見えねとも、内に神あるによりて、様々のわざをなす也。神妙劍の座に、神を据る故に、様々の妙が手足にあらはれて、軍に花をさかする也。神は、心の為には、主人也。神が内にありて、心を外へつかふ也。此心又氣をめしつかふ也。氣をめしつかひ、神の為に、外にかける。此心が、一所に逗留すれば、用がかくる也。然によりて、心を一所にと、めぬ様にするが、簡易の事也。たとへば、人の主人、内に居て、下人をよそへ使にやるに、行さきにとまりて、かへらねば、用がかくることく也。心が物にとまりて、本位にかへらねば、兵法の手前が、ぬくる也。此故に、心を一所に、とめぬ事、兵法のみにあらず。万事にわたる事也。

神と心との

二心得あり。

○一 病氣を去三之事、敵にある病也。

○一 指目の目付、拍子の持所之事、口伝すへし。

○一 歩之事

歩みは、早もあく、遅きもあしく、常のことくするくと何となき歩よし。過たるも、不及もあしく、中をとる也。早は、おどろき、ふためく故也。おそきは憶して敵をおそる、故也。一切どうてんせぬ位也。人の目あひて居を、扇にて目の前へ、うちかくるに、目まちするは、常の心なり。目まちするは、動転するにてはなし。又かさねて、二度、三度、うちかけておどろかすに、そつ共、目まぢせぬは、動転したる物也。めまちせらる、を、こらへてせまひくとおもふて、せぬはしたよりは、殊外心うこく也。不動心と云は、常のことくにして、目のあたりへ、物かくれば、何となく、目まぢする也。是かとうてんせぬ位也。只常の心をうしなはぬ心持がせんなり。うごくまひとするは、うこひたる物なり。うこくは、うくかぬ道理也。水車は、めくるか常也。めくらすは、常にたかふた物也。人の目まちは常也。めまちせぬは、心がうこく也。常の心をかへずして、いつものことく、するくと歩がよき也。すかたも心も、動転せぬ位也。

○一 一理之事 向構の時の心懸鐘の時の心持也。無刀の用心。右の一理と云事は、兵法のかくしこと業也。太鉢の兵法には、如何様にも自由かなる物也。さしつめたるきびしき事、一大事也。そこをよく心にかけ、こまかに目を付て、ほかとしたる事に、あは

ぬ用心する所を、一理と云也。太刀にても、むかふがまへに、ちかくとさしあて、居たり、鎧を五寸一尺にさしむかふたりなどする時の、用心。是を一理と云也。わがうしろに、かべついちなどありて、ひかれぬ時、むかふよりさしあつる時などの用心也。一大事、一難儀の所と心得へし。無刀の時、五寸一尺のはづし、目を一所にすへ、心を一所にと、め、油断しては、中々不成就也。か様の事を、心にかくるを、一理と云て、秘密する所也。

○一 敵身方面一尺之事、相寸無刀の用心也。

道具、両方ともに、身をはなる、事、一尺なり。一尺にては、はつす物也。此尺よりちかくよるは、はやふし。

○一 是極一刀之事

是極とは、これ至極也と云儀也。一刀とは、刀にあらず。敵の機を見るを、一刀と秘する也。大事の一刀とは、敵のはたらきを見るが無上極意之一刀也。敵、の機を見るを、一刀と心得、はたらきに随て、打太刀をは、第二刀と心得へし。是を根本にして、様々につかふなり。手利劍、水月、神妙劍、病氣、此四、手足の動以上五也。是を五観一見と習也。手利劍を見る、是を一見と云。残四つをは、心に持程に、観と云也。目に見るをは、見と云、心に見るを、観と云。心に観念する儀也。四観一見といはずして、五観と云は、おしこめて、五観と云、其内より、手利劍を一見と云也。手利劍、水月、神妙劍、病氣、身手足、此五也。此内四をは、心にして眼に、手利劍を見るを一見と云也。

○一 水月、神妙劍、病氣、身手足此四の分別

一 水月は、立合場の座取也。

一 神妙劍は、身の内の座取也。

一 身手足は 一 敵のはたらきを見る

一 我身のはたらき

一 去病は手利劍を見む為也。

右然は、極る所は、手利劍の有無を見る事、專一也。四は、太躰也。病をさる手利劍見む為也。病さらされは、必、病にとられて、見そこなふ也。見そこなへば、負也。病とは、心の病也。心の病とは、心のそこ／＼に、と、まるを云也。心を、一太刀うつた所に、と、めぬ様に、すへし。心をすて、すてぬ也。

○一 敵のかまへ、太刀先、我方へむかは、あぐる所につけてうつへし。

○一 敵をうつとおもふて、我身をうたすへし。敵が我をうちさへすれば、敵をばうつた物也。

○一 水月の場をとれ。それより、心持を專にすへし。われ場をとらんとするに、敵すでに、先、場を取たらは、それをわがにすへし。つもりさへちがはねは、敵がよつて五尺も、わかよつて五尺も、敵と我との、間の尺は、同事也。人が場をとりたらは、とらせてくがよき也。場をとるとかたまりたるは、あし、身をうきやかに持へし。

○一 足ふみも、身のあてかひも、神妙劍の座に、はづれぬ様にすへし。立あはぬさきから、此心かけ、わするへからす。

○一 神妙劍見る事三段の分別

心にて見るを根本とす。心から見てこそ、目もつくべき物なれ。然は目にて見るは、心の次也。目にて見て、その次に、身足手にて見るへし。身足手にて見るとは、敵の神妙劍に、わか身足手の、はつれぬ様にするを、身足手にて見ると云也。心にて見るは、目にて見ん為也。目にて見るは、足手を敵の神妙劍の座に、あてんと云事也。

一 心似二水中、月一形如二鏡上影一

右の句を、兵法に取用心持は、水には、月のかけを、やどす物也。鏡には、身のかげをやどす物也。人の、心の物にうつる事は、月の水にうつることく也。いかにも、すみやかにうつる物也。神妙劍の座を、水にたとへ、わか心を月にたとへ、心を神妙劍の座へ、うつすへし。心がうつれば、身か神妙劍の座へうつる也。心かゆけは、身かゆくなり。心に、身はしたかふ物也。又鏡をは、神妙劍の座にたとへ、わか身を、かけのことくに、神妙劍の座へ、うつせと云心に、此句を用る也。手足を、神妙劍の座に、はづすなど云儀也。月の、水に、かけをうつすは、いかにもすみやかなる物也。はるく高き天にあれとも、雲がのくといなや、はや水にかけがさす也。高天から、そろくと、連々にくだりて、うつる物にあらず。目まぢ一せぬうちにはやうつるなり。人の心の物にうつる事、月の水にうつるがごとく、すみやかなと云たとへなり。意速如二水月鏡像一と云経文も、月が水にうつりて、さだかにあれとも、水のそこを、さぐれば、月はなひと、云儀理にはあらず。たとをき天の上から、間もなく、そのま、うつると云心也。鏡にうつるかたち

も、何にても、物がむかふと、はやうつる也。すみやかなと云たとへなり。人の心の、物にうつる事、如此也。目まちする間に大唐までも、心はゆく也。とろく、まどろみ入よとおもへば、千里の外、古郷へも、夢は行也。か様に、心のうつりゆく事を、水月鏡像にたとへて佛は説給ふと也。経は、異音によむ程、水月とよむと也。

○一 右の句を、又、兵法の、水月にあて、も同事也。我心を、月のことく、場へうつすへし。心がゆけば身かゆく程に、立あふてやり、鏡に、かけのうつることく、場へ身をうつすべし。下作に、かねて、心をやらねは、身かゆかぬ也。場にては、水月、身には、神妙劍也。いつれも、身足手を、うつす心持は、同事也。

○一 急々にかゝる事、以外あしき事也。下作によく持て、立あふてから、よく見すまして、後の、急々懸々也。ふためかぬ事簡要也。

○一 心をかへす事

右の心持は、一太刀うつて、うつたよとおもへは、うつたよとおもふ心が、そのま、そこにと、まる也。うつた所を、心が、かへらぬによりて、うつかと成て、二の太刀を、敵にうたれて、先を入たる事も、無に成、二の太刀を、うたれて、負なり。心をかへすと云は、一太刀うつたらは、うつた所に、心を、かす、うつてから、心を、ひつかへして、敵の色を見よ。うたれて、敵氣をちかゆる物也。うたれて、やれ口惜や、うたれたよとおもひて、いかりも出る物也。いければ、敵きひしく成物也。爰を油断して、敵にうたる、物也。

うたれた敵は、いかり猪とおもふへし。われは、うつたとおもふて、心をと、めて、油断する。敵はうたれて、氣か出ると覚悟すへし。又うたれたる所を敵は、はや用心するを、われは、前の心てうつて、うちははずす物也。うちはつせは、こして、敵が我をうつべし。心をかへすとはわかうつた所に、心をと、めず、心を我身へ、ひとつれと云儀也。心をかへして、敵の氣色を見よと云儀也。又は一むきに、打た所をかへさずして、程をぬかさず、二三重た、みかけて、うつて、かほをも、敵にふらせぬはたらきも、至極の心持也。間不レ容レ髪とは是を云也。一の太刀と、二太刀との間へは、髪一すち入へき間もなく、はし／＼と、つ、けてうつ心也。

法戦場とて、禪の問答に、一句とふに、こたゆる間へは、髪一すぢ、いる、程も、間なく答る也。延たれば、人にこまる、也。勝負分明也。間不レ容髪とは此事也。二三重、た、み打に、うつ太刀の、急なる事を云也。

○一 一去と云心持之事

○一 空之心持之事

○一 捧心之心持事

右一去と云心は、数々を、一にさると云也。数々とは、病の数々也。病とは、心の病なり。心にある程の病の、数々を、一にして、はらりと去也。病の数々は、別の卷にしろす也。凡病とは、心のと、まるを云也。佛法に是を着とて、以外きらふ也。心が一所に着しと、まれば、見ル所を見はつし、思外に、負を取也。心のと、まるを、病と云也。此病の、数々を一つに、ひつく、つて、されと云心

に、一去と云也。数々の病を、一去して、唯一を、見はつさぬ様に也。さて唯一とは、空を云也。空とは、かくしこと葉なり。秘傳すへし。空とは、敵の心を云也。心は、かたちもなく、色もなくして、空なる故也。空唯一を見るときは、敵の心を、見よと云儀也。佛法とは、此心空をさとする事也。心は空なりと説人もあれとも、さとり明る人は、まれ也となり又捧心と云は、心を捧るとよむ字也。敵の心は、太刀を、にきつたる、手にさ、げて并るなり。敵の、にきつたる拳のいまたうごかさる所を、そのま、うつ也。そのうごか、うごかぬかの所を、見ん為に、一去と云也。百病を、一去して、空を見はつすなと云なり。敵の心か、手にある也。手にさ、げて居る也。うごかぬ所を打を、空をうつと云也。空は、うごかぬ物也。かたちなければ、うごかず。空をうつとは、うごかぬ所を、はやうと云儀也。空と云事、佛法の眼也。空に、虚空と、真空との差別あり。虚は、いつはりによむ。真は、まこと、よむ。然は、虚空とは、いつはりむなしき空にて、何もなき事のたとへに引なり。真空とは、真実の空也。即心空也心は、かたちなき事は、虚空のことくなれとも、一心は此身の主人にて、よろづのわざをする事、皆心にあり。其心うごきて、はたらく事、心のする所也。心のうごかぬは空也。空のうごくは心也。空がうごひて、心となりて、手足へはたらく也。太刀を、にきつたる拳の、うごかぬ時、はやうつ程に、空をうてといふ也。捧心と云も、心はめに見えぬ物なり。見えぬにより、空ともいひ、うごかぬによつて、空とも云也。太刀をにきりたる手に、心をさ、げて居れとも、めには見えぬなり。手に心を

さ、げて、いまたうこかぬ所を、はやうてと也。此心空は、目にも見えすして、何もなき物也と、いはんとすれば、此心空うこきぬれば、様々の事をなし、手に取、足にふみ、色々の妙を、つくすも、此空此心のうこき出て、なす所也。此心を、さとりあきらむる事は、書を見ても難レ成事也。説を聞いても難レ至道也。書出す人も、説人も、いにしより、書出す法様、説法様を以て、書ばかり、説ばかりにて、心に心を得道したる人はまれなると也。人の様々のわざ、きどく、皆心のわざなれば、又天地にも此心あり。これを天地の心と云。此心が、うこけば、雷電風雨をおこし、時ならぬ雲の氣色、炎天に、雪霰を飛ばし氷をふらしなどして、人をやましめ、などする事あり。然は、此空は、天地にありては、天地のあるじ、人の身にありては、人の身のあるし、舞をまへは、舞のあるし、能をすれば、能のあるし、兵法をつかへは、兵法のあるし、鉄炮をうては、鉄炮のあるし、弓を射れば、弓のあるし、馬をのれば、馬のあるしなり。此あるしに、私曲あれば、馬にもものられず、弓もあたらず、鉄炮もはつるへし。此身に、よく、此心が、座敷、位を得て、在所に、すはりぬれば、よろつの道、自由也。此心を、一度見付て、さとり明る事、大切也。人ごとに、我は、心を見ひらきて、よく、わか心をつかひ得たりと、いへとも、此心を、とくと、見付たる人は、まれなりと也。さとりざるしは、其身にあらはるへし。見る者は、よく見しるへし。さとりたれば、一切のするわざ云事、その身のおこなひ、すぐなるへしすくならずは、明らめたる人とは、いひかたしと也。すぐなる心をは、本心と申也。又は、道心とも云也。曲汚

たる心は、妄心と云、人心とも申也。わが本心をさとり得て、其本心にわがなすわざの、かなふ人は、床しき事也。此こと葉、われよく心を得て、如此いふにあらず。如此いふといへとも、われも、心のすぐにして、すぐなる心になふこととくに、身の進退動静する事は、難レ成事なれとも、道なればしるす者也。しかりといへ共、兵法には、此心まつすぐにして、身手足に、かなはさればならざるわざなり。平生の、わが身の、進退は、道にかなはされとも、兵法の道には、此得道なくては、ならざる也。よろつの所作に、此心はづれず、其道々の上には、此心かなへとも、よの所へ、通して、する事は不レ成物也。通してしり、通してなす事をは、通達の人と云也。一能一藝の上に通ずるは、其道々の、達者と云也。通達とはいふましきなり。

さる哥に、

妄 妄心とて、あしき心也。わが本心を、まよはする也。

本 心まよはず 本心也。此心を妄心が、まよはず也。

妄 心なれ 妄心をさして、心なれと云也。心をまよはず心也と、さしていふ也。妄心也。

妄 心に 妄心也。此妄心にと云也。

本

心 本心也。心殿と、よひかけて、本心よ、妄心に心ゆるすなと也。

本

心ゆるすな 本心也。妄心に、本心を、ゆるすなといふなり。

右の哥、真妄をいふ也。心に本心、妄心とて、二つあり。本心得て、本心の様になせば、一切の事すぐ也。此ノ本心、妄心に、おほはれて、まがりけがれぬれば、一切のしわざまがりけがれぬる也。本心妄心とて、真黒なる物、二つならひて、各々にあるへきにあらず。本心と云は、本来の面目、父母未生以前より、そなはりて、かたちなければ、生ずると云事なし、滅する事なし。形こそは、父母もうみなせ、心はかたちなければ、父母ノ生なせりともいひかたし。人生るれば、そなはりて、此身にあり。禪は、此心を傳たる宗旨也と承る所也。又相似の禪とて、似たる事をいひて、真の道にあらぬ人多ければ、禪者とて、一箇にあらぬと也。妄心といつば、血氣也。私也。血氣也とは、いかなとならば、血のわざなり。血がうこきて、上へあがり、顔の色、変じ怒りを出す。又わが愛する所を、人にくめは、怒り、恨み、或は、又わがにくむ所を、人同心にくめは、悦をなし、非をまげて、理となす。人至宝をあたふれば是を請て、悦をなし、顔に、笑をふくみ、血氣顔にうるほひを生ず。於此以レ非ヲ為レ理。是皆此身の血氣肉身より、時にあたつて、わき出る心也。是を妄心と云也。此 妄心がおこれば、本心かくれて、

妄心となりて、皆あしき事のみ、あらはる、也。然は、道ある人は、

本心にもとつきて、妄心をうすぐする故に、尊し、無道の人は、本心かくれ、妄心さかんなる故に、曲事のみにして、まがり濁たる名を取也。右の哥は、たけもなき哥なれとも、邪正をよくいひわけたる也。妄心は、皆何事をなせども、邪也。此邪の心が、出たらは、兵法も、負へし。弓もあたるへからず。鉄炮もはづるへし。馬ものらるまし。のふも見るしかるへし。舞も、くるしかるへし。云事もあやまりあらはるへし。一切、皆たがふへし。本心にかなは、何事も、皆よろしかるへし。偽をかまへて、偽なきといふ。そのことは、妄心なる故に、早く、其偽あらはる、也。心まことなれば、ことはりに不及して、聞人、やかてしる。本心にことほり不入物也。妄心は、心の病なり。此妄心をさるを、病氣をさるといふなり。此病氣をされは、無病の心也。即此無病の心を、本心と云。本心に、かなは、兵法は、名、人なるへし。ありとあらゆる程の事、一も此道理にはづるべからず。

三 小城鍋島家本との比較

1 構成

『兵法家伝書』上巻は「殺人刀」と呼ばれる。この「殺人刀」の巻は、一八の項目から構成されている。

- ① 手字種利劍(百様の構あり共、唯一つに勝つ事) ② 有無の拍子 附有も有、無も有と云ふ事 ③ 水月 付其影の事 ④ 神妙

劍の事(神・妙の積) ⑤病気を去る ⑥指目の事 ⑦歩みの事 ⑧一理の事 ⑨敵身方両一尺の事 ⑩是極一刀の事 ⑪四観の事(水月、神妙劍、身手足、病氣) ⑫下作の事 ⑬心をかへす事 ⑭捧心への階梯(一去と云ふ心持の事、空の心持の事、捧心の心持) ⑮本心・妄心(天地の心)

2. 考察

前回の「兵法家傳書上巻序」において、細川家本より後に執筆された小城鍋島家本が細川家本を底本としていない事由を述べた。それは本文において、

ア. 平仮名の元となる漢字が一定していない。

イ. 漢字と平仮名が不統一である。

ウ. 改行すべきところがされていない。

の三点に集約された。また、朱書きの部分においても、

ア. 振り仮名の施し方

イ. 句読点の打ち方

ウ. 特徴的な読み方

において統一的な振り方が見られないことを指摘した。⁽⁵⁾このうち、本文における「ウ」を除く五点は、本稿で翻刻した「兵法家傳書下巻」においても同様に言える。したがって、ここにおいても小城鍋島家本が細川家本を底本としていないことを明らかにすることができ

る。ところで、この「兵法家傳書下巻」では、これらの特徴の他に、

本文におけるルビの振り方と言葉の欠如をあげることができる。これらは両書を比較するうえで特筆すべき点と言えるため、以下、それを取り上げてみたい。

一 ルビの振り方

本稿で取り上げた小城鍋島家本では、以下の用語にルビが振られている(内がルビに相当)。

間^ニ不^レ容^レ髪(マニハツライレス) 唯一(ユイイチ) 心空(シンクウ) 雷電(ライテン) 真妄(シンマウ) 邪正(ジャシヤウ)

ところで、これらの用語を細川家本で確認すると、すべて左側に次のようなルビが振られている(内が左側ルビ)

間^ニ不^レ容^レ髪(アイタヘカミスチライレ) 唯一(ヘタッヒトツ) 心空(シンノクウ) 雷電(カミナリイカツチ) 真妄(マコトミタリ) 邪正(ヨコシマタ、シ)

参考までに、江戸柳生家本を底本として翻刻した渡辺一郎氏校注『兵法家伝書』⁽⁶⁾においても、これらの用語には同様の左側ルビが振られていることが窺える。

左側ルビはこの六つの用語のみに見られる特徴である。その五つすべてにおいて、小城鍋島家本では振られていないのである。これは、意図的にふらなかつたか、あるいは底本となったものに振られていなかったかのどちらかと考えられる。

二 言葉の欠如

構成⑬「心をかへす事」において、小城鍋島家本には次のような「くだり」がある。

心をかへすとはわかうつた所に、心をと、めず、心を我身へ、ひとつれと云儀也。心をかへして、敵の氣色キシヨクを見よと云儀也。又は一むきに、打た所をかへさずして、程をぬかさず、二重三重た、みかけて、うつて、かほをも、敵にふらせぬはたらきも、至極シゴクの心持也。(傍点筆者)

ここは、打ったところに心を置くことなく、打つたらすかさず我がほうへ心を引返せ、ということを読んでいる箇所である。ところで、傍点の箇所であるが、細川家本では、「打た所を、心をかへさずして」と、「心を」という言葉が挿入されている。これは、江戸家本を底本とした渡辺一郎氏校注『兵法家伝書』⁽⁷⁾にも窺える。すなわち、小城鍋島家本においては、「心を」という言葉を書き忘れたと看做すことができよう。

結語

前回に指摘したとおり、両家本の原本と言えようなものが江戸柳生家にあると渡辺氏が述べている。⁽⁸⁾すると、既に両の原本の段階で差異が見られるのか、あるいは、書写の段階で写し手の意図が加味されたのか、といった事が考えとして浮かぶが、いずれにしろその原本との比較が待たれるところである。

さて、本稿において指摘した新たな差異は、江戸家本との比較からしても小城鍋島家本が成立する過程で書写されなかった可能性が高いことを示していると言えよう。即ち、四系統ある『兵法家伝書』

のうち、二つにおいて書き表されているものが欠落していることに鑑みれば、やはり小城鍋島家本の成立過程において何らかの事情により書き忘れた、欠落していったと見るのが自然であろう。すると、この小城鍋島家本に見られる句読点や朱書き、改行等の特徴は、本書独特のものとして捉え、他の書と分けておく必要がありそうである。

ただし、現段階では「兵法家傳書下巻」に併設されている「無刀之巻」の翻刻を終えていないことから、早急な結論を導くには早いと考える。次回、この「無刀之巻」の比較を終えた段階で、最終的な結論を導くことにしたい。

【注】

- (1) 今村嘉雄他、同朋舎出版。全十巻で付属として小城鍋島家『兵法家伝書』の複写物がついている。
- (2) 拙著『兵法家伝書に学ぶ』日本武道館、二〇〇四年。
- (3) 『兵法家伝書』下巻の末尾に「此巻上下を殺人刀活人剣と名付たる心は」とある。
- (4) 前掲書(2)、一二二頁参照。
- (5) 拙著『兵法家伝書』伝本の比較研究』目白大学人文学研究第四号、二〇〇八年。
- (6) 日本思想史大系六一『近世芸道論』所収、岩波書店、一九七二年。
- (7) 同右、三三三頁。
- (8) 同右、一六四頁。

Abstract

Comparing the text of “Heiho-kaden-Syo” of Ogi-Nabeshima (which the author is now reproducing) with that of Hosokawa, this study aims to illustrate all the textual variants to see if the text is based on the common source. Reading “Katsuninken Gekan” from “Heiho-kaden-Syo” the finds that 1) the textual style peculiar to “Katsuninken Gekan” is also found in “Setsuninto Joka”; 2) the different styles of rubric (giving kana along Chinese characters) are found especially in “Katsuninken Gekan”; 3) these two texts of “Heiho-kaden-Syo” are therefore unlikely to be based on the same textual source.